

場面緘黙症の研究 (II)

——バウムテストおよびP-Fスタディにみられる特徴と予後との関係——

一谷 彊・津田浩一・西尾 博・岡村憲一

A Study of Elective Multism in Children (II):

Response Characteristics Gained by Baumtest and P-F Study
and Their Relations to Prognosis

Tsuyoshi ICHITANI, Koichi TSUDA, Hiroshi NISHIO, and
Norikazu OKAMURA

Received August 4, 1972

目 次

導入

I 場面緘黙症児にみられるバウムテストの表現 特徴と予後との関係

1. 目的
2. 対象
3. 方法

(1) バウムテストの表現パターンの類型化について

①幹：②枝ぶり：③樹木の大きさ：④樹木の成熟度：⑤幹先端処理：⑥運筆

(2) 予後について

4. 結果と考察

(1) バウムテストの表現パターンを類型化した各群の特徴について

①第Ⅰ群(自我肥大型)：②第Ⅱ群(自我収縮型)：③第Ⅲ群(未成熟型)：④第Ⅳ群(性格偏倚型)：⑤第Ⅴ群(疑問型)

(2) バウムテストの表現パターンの類型と予後との関係について

(3) 処遇形態・バウムテストの表現的類型・予後の相互関係について

(4) 処遇後の経過期間・予後・バウムテストの表現パターンの類型の相互関係について

(5) バウムテストの表現パターンの類型・処遇の形態・処遇後の経過期間・予後調査の相互関係についての結果

(6) バウムテストの表現パターンの類型と生育史との関係について

(7) バウムテストの表現パターンの類型と症状との関係について

5. まとめ

II 場面緘黙症児にみられる P-F スタディの反応特徴と予後との関係

1. 目的
2. 対象
3. 方法
4. 結果と考察

(1) P-F 反応の全体的特徴

- ① 評点因子について
- ② 攻撃方向について
- ③ 反応型について
- ④ 反応転移について

(2) P-F 反応パターンの類型の特徴

- ① 第Ⅰ群 (Ⅰ反応型) について
- ② 第Ⅱ群 (Ⅱ反応型) について
- ③ 第Ⅴ群 (Ⅲ反応型) について
- ④ 第Ⅳ群 (Ⅳ-M 混型またはⅠ-M 混型) について
- ⑤ 第Ⅲ群 (Ⅴ-Ⅰ 混型) について

(3) P-F 反応パターンの類型と予後との関係

5. まとめ

Ⅲ バウムテストでの表現パターンの類型・P-F 反応パターンの類型と予後との関係

Ⅳ 結論と要約

参考文献

Summary

導入

場面緘黙症については、これまで多くの研究がなされてきているが、その接近法としては、症児の生育歴、現在の症状、家族歴、家庭環境や家族力動などの情報をもとにしたものと、症児の治療過程でみられる行動特徴の分析とに依存するものがほとんどである。

元来、場面緘黙症を持つ子どもは、自己の内的世界を表出することが少ないため、症児自身の所産になる資料をもとにした研究は、治療的経験によるものに限られており、精神測定法ないし投影法的な接近法をとったものはほとんど見あたらないのが一般的な傾向といえる。

そのため、ここでは、われわれの臨床的経験から、場面緘黙症児にも比較的实施可能で、彼らの反応的所産を入手可能な、プロジェクト・テクニックのなかのひとつである、バウムテスト (Der Baumtest) とローゼンツェイク P-F スタディ (the Rosenzweig P-F Study) とを用い、これまでの臨床的経験から得たいわゆる臨床的妥当性と、精神測定法的見地とから、場面緘黙児へのアプローチを試みた。

しかしながら、今回は、場面緘黙という主訴で、児童相談所に来談した初診時に、上述2種のテストを実施している。そのため、その時点での反応様式は、すでにいわゆる場面緘黙という状態にある児童の反応パターンや所産がさぐれるのみで、場面緘黙児の発生機序やパースナリティ特性などを説明するには、なお限界があることを断っておかなくてはならない。

Ⅰ. 場面緘黙児にみられるバウムテストでの表現特徴の予後との関係

1. 目 的

場面緘黙症児にバウムテストを施行し、その表現パターンの類型化を試み、特徴を明らかにする。つぎに、その類型と症児の状態像や予後との関係を検討する。

しかし、バウムテストをもって、症児の人格像全体を把握することは困難であり、あくまでバウムテストという範囲と限界のなかでの検討にとどまるものである。なお、バウムテストについては、Koch (1952) の立場を主たる観点とする。

2. 対 象

一谷ら (1971, 1973) による本研究に関連した『場面緘黙症の研究Ⅰ—形成要因と心理機制について—』で記載されている症児の中で、スタディ段階において、Koch (1952) の提案する教示に従ってバウムテストを施行した小学生14名 (男子10名、女子4名) を対象とする (表1)。

症児の処遇については、情緒障害児短期治療施設 (以下「情短」と略称する) に入所して治療を受けた児童9名、児童相談所で通所治療 (以下「通所治療」と略称する) を受けた児童1名、児童相談所の児童福祉司による指導 (以下「SW指導」と略称する) を受けた児童2名、

表1 バウムテストを実施した症児の具体的記述

症例 No.	名前	テスト 時 学年	スタディ時の状態像	処遇形態	予後調査時の状態像	予後 調査 期間	予後 判定	バウム テスト の類型
2	H. Y. (男)	3	学校では返事もしない、他児の遊びも見ているだけ。家庭では我まま一杯である、買物には一人で行ける。	面接指導1回、情短入所拒否	現在商業高校1年在学中、成績は普通で元気に登校、卓球部に入学し、友達もでき、先生にも答えている。	6年6月	良好	I
6	A. K. (男)	3	2年生になってから返事もしなくなった、友達もいない気が弱く、泣き虫で、ちょっとした注意でも泣きます。家庭では口数少なく、消極的態度、姉に依存的。	情短収容治療	現在中学1年生、風紀委員もしている。休まず登校し、毎晩2時間位勉強している。学校であまり喋ってはいないが、必要なことは喋っている。	4年	良好	II
7	Y. H. (男)	4	学校では全く喋らない、集団行動はとれる。家庭では両親と近所の友達の4人だけ、他人が加わると喋るのをやめる。	情短収容治療	現在中学2年生、成績良好、親しい友達が1～2名ありyes, no は言っている。先生に1～2回答えたことはある、家庭教師とは親以上によく喋る。	3年8月	やや良好	III
8	T. R. (男)	3	学校では友達もなく全く喋らない、教室の移動もできない、身体検査時着脱しない、授業中教室を徘徊する、家庭では元気で近所でもよく遊んでいる。	児童福祉司指導	現在中学1年生、集団の中では全く喋らない。友達は1～2名おとなしい子がいる、学校を時々休む。家庭では先生が話しかけると答える。	3年6月	不変	IV
9	H. S. (男)	3	幼稚園から喋らず立ったまま、入学後も体を硬直させ何もしない、カバンを背おったままで給食も食べない、便所にも連れていってもらった。	情短収容治療	現在小学4年生、学校で友達と話しをしており、先生とはyes, no 程度、友達もあり、よく野球をして遊んでいる。	1年3月	良好	II
11	K. A. (男)	3	学校では孤立、授業の用意もしない、おとなしい子にいたずらされても黙ってなすがままにしている、国語の教科書は読む、ノートはとらない。	情短収容治療	集団行動がとれない、テストは白紙で提出する。修学旅行に行っても自ら歩こうとせず皆んなに押してもらっていた。	2年6月	不変	IV
12	I. M. (女)	6	学校で全く喋らない、順番で本を読まされると小声で読む、友達なし、家庭では人と会うのを嫌がる、母にはあまり喋らない。	通所治療継続中	最近登校拒否をし下痢・腹痛を訴える。しかし兄に注意され、再登校をしている。家庭外での言葉は聞かれないセラピストの伝言を母に伝えられない。	2年1月	不変	V
13	J. A. (女)	2	学校で先生が1対1で話すとき「フン」と言う、入学後1年間発語なし、授業中は何もせずじーと坐っており「お客さん」学業不振 (all 1)	情短収容治療	現在小学4年生、学校での言葉は皆無であるが首を振って意志表示はする。学業不振、友達なし、クラスのお客さんと皆んなの世話になっている。	1年1月	不変	III
14	I. H. (男)	2	学校で便所に行くのに友達に背負ってってもらっている。他人がいると学校・児相で母に喋らない、家庭では兄とよくケンカをし、兄の友達とはよく話す。	情短収容治療	現在、特殊学級に在籍、学校では笑うだけで喋らない。うなずくという形で返事はしている。友達なし、学校のことを家庭で報告しない。	1年10月	不変	V
15	O. H. (男)	5	学校で全く喋らない、首を振って意志表示する。友達なし、時々女児にいたずらする。家庭では母をなめている横暴で動作も荒っぽい。	情短収容治療	現在中学1年生、学校ではおとなしく、皆んなに聞こえないが先生に小声で話す。熱に通う。家庭で反抗的、友達が2～3人ある。成績あまりよくない。	1年10月	やや良好	I
16	N. S. (男)	4	学校で全く喋らず、面白い時にニヤニヤ笑う、家庭では元気でよく遊んでいる。	児童福祉司指導	現在特殊学級に在籍、休むことが多く、全く喋らない、掃除や作業はよくする。友達なし、家庭では同年児と野球したりする。	1年10月	不変	III
17	N. H. (女)	1	学校では、誰とも全く喋らない、ハーモニカはふける。体育・テストはできる。家庭ではよく話す。	情短収容治療	学校で友達があり、よく遊んでいる。先生への口数は少ないが、生活は意欲的で近所の友達と遊んだりして喋っている様子。	1年7月	良好	II
18	I. T. (男)	5	学校で喋らない、国・算の教科書しかもっていかなかったりノートは全くとらない。体育は不参加、給食は食べない教室の移動をしない、家で勉強するように言うと涙ぐむ	情短収容治療継続中	施設内での適応は低い。行動は活発であり、喋るが自己中心的で横柄である。食事が皆と一緒に食べられず職員と別室で食べている。	1年6月	不変	III
20	H. Y. (女)	2	学校で一言も喋らない。名前を呼ばれると口を動かすが声にならない。家庭とか近所の友達とは話すが、そこに他人が入ると黙ってしまう。	面接指導1回、情短入所拒否	現在小学3年生、学校では一言も喋らない、友達もない家庭では同年令児と遊び喋っているし、学校でも話している、買物に一人で行く。	9月	不変	III

および、情緒障害児短期治療施設への入所を拒否し、面接指導1回だけで終わった児童（以下「面接1回」と略称する）2名とに分かれている（上記の症児の具体的記述については表1を参照されたい）。

3. 方法

(1) バウムテストの表現パターンの類型化について

林ら（1970）によると、“バウムテストを解釈し判定するときには、描かれた樹木の形を分析（形態分析＝発達テスト的側面）し、つぎに鉛筆の動き（動態分析＝性格テスト的側面）を観察し、これに加えて、樹木の画面における配置（空間象徴）の意味を読みとるべきである”と述べられており、バウムテスト解釈のための3つの側面を重要な諸側面として挙げている。なお、こうした諸側面の細部の検討に入る前段階として、樹木を、全体として直観的に印象をとらえておくことが大切であることはいうまでもない（Koch, 1952；林・国吉・一谷, 1970）。

しかし、バウムテストを全体として類型化を試みるについては、他の投影法で示されてきているような、数量的分析からのアプローチははなはだ困難である。したがって本研究では、出井ら（1969）が試みたように、テストの詳細な項目による数量的分析による方法をとらず、上記の解釈上の立場を前提として、樹木の全体的把握を目ざして類型化の着眼点となるような項目を設定し、それを類型化の基準とすることにした。以下、その基準的項目を示す。

① 幹

Koch (1952) や Hammer (1958) は、“幹は、自己概念 (self-concept) の基本領域と、自我の強さ (ego-strength) を頻繁に表現する天賦の才能に関連する”と仮定している。Buck (1948) もまた、“基本的な力 (basic power) と内的な強さ (inner strength) の感情を表現する〔分析用語では「自我の強さ」(ego-strength)〕”と仮定しているが、両者は一致した解釈仮説といえる。

この幹の状態について、太さ・力強さ・大きさなどをみる。

② 枝ぶり

Koch (1952) によると、“枝は、幹と同様に天賦の才能が投影される”と仮定し、さらに、“樹冠 (crown; Krone) の外側部は、環境との接触地帯、内にあるものと外にあるものとの間の関係を構成する”と述べている。また、Buck (1948) は、“枝の構造は、環境から満足を引き出す能力の感情を描く”と仮定している。この項目では、したがって、枝の一線枝、二線枝などという発達テスト的側面とともに、枝の伸び具合やその方向などを重点的にみることにした。

③ 樹木の大きさ

画用紙の紙面に対して、描かれた樹木の大きさについて、紙面いっぱい描いているか、きわめて小さい範囲に描いているかなどをみる。

④ 樹木の成熟度

樹木の、紙面に比しての大小には関係なく、この項目では、若木であるか枯木であるかなど、樹齢をみようとする。Hammer (1954) によると、“そこに投影された年齢は、被験者の心理的・社会的・性的成熟 (psycho-social-sexual maturity) について感じているものに関係がある”と述べられている。

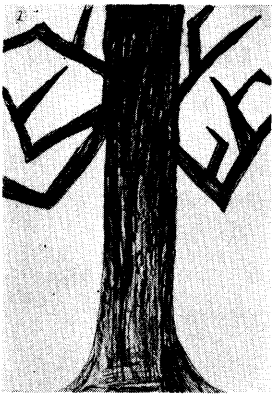
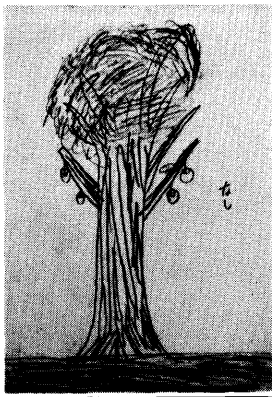
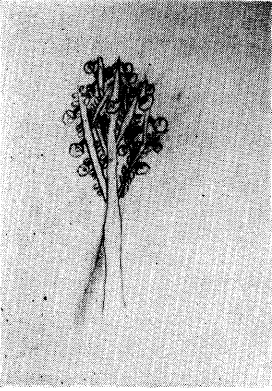
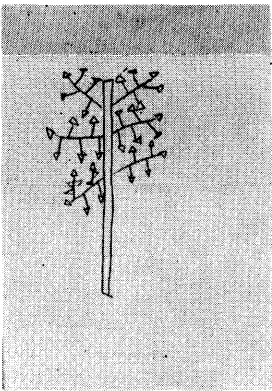
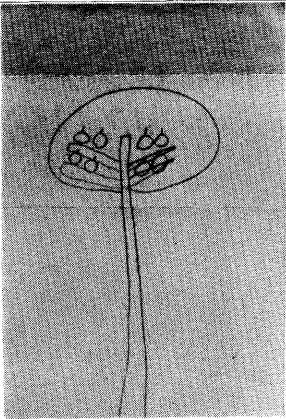
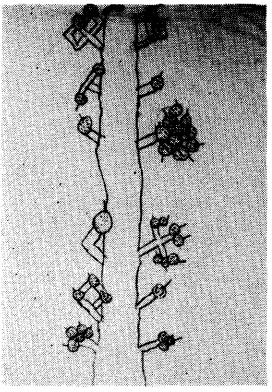
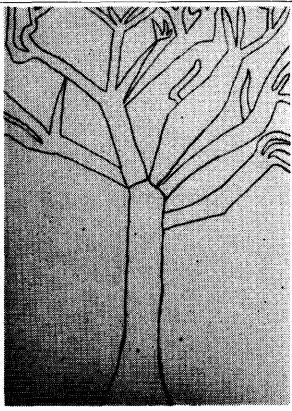
症例 類型		症	例
神 經 症 的 傾 向 群	I 群 (自我肥大 大型)		
		症例 No. 15 O.H.	症例 No. 2 H.Y.
	II 群 (自我収縮 型)		
		症例 No. 6 A.K.	症例 No. 17 N.H.
	III 群 (未成熟 型)		
		症例 No. 16 N.S.	症例 No. 13 J.A.
性 格 偏 倚 的 疑 問 群	IV 群 (性格偏倚 型)		
		症例 No. 11 K.A.	症例 No. 8 T.R.
	V 群 (疑問 型)		
		症例 No. 7 Y.H.	症例 No. 14 I.H.

図 1 場面緘黙症児によるバウムテストの表現パターン

⑤ 幹先端処理 (apical termination)

藤岡ら (1971) が、バウムの成長をみる観点として明らかにしたものであり、幹先端の処理法は、発達テストの側面を示唆する指標として重視したい。確かにこの項目は、われわれの臨床経験からも注目に値するものと考えていたものである。

⑥ 運 筆

Koch (1952) は、この項目を、解釈上の重要な一側面としている。力強い、弱々しいか、手慣れているかなどをみる。また、藤岡ら (1971) は、バウムの成熟判定の着眼点として、描線の成熟をあげている。

以上の6項目を、バウムテストの表現パターンの類型化への key としてとりあげた。

なお、出井・飯田・津田 (1969) は、登校拒否児のバウムテストからの予後判定を試みた。この研究では、量的分析を行なったが特徴的なものは見出し得なかった。しかし、①筆勢、②枝ぶり (方向・伸びやかさ)、③写実性の程度 (図式的・空間倒置)、④木の大きさ、⑤成熟度、⑥全体のバランスを着眼点として、全体的な評価を重視して判定した結果では、予後調査との対応がみとめられたのである。

こうしたことから、今回の類型化にあたって、上記の②枝ぶり、③写実性の程度、④木の大きさ、⑥全体のバランスを基準のなかにとり入れて参考とした。

(2) 予後について

予後調査期間は、処遇の終了した時点から、現在 (昭和46年9月) までの期間を原則としている。その期間は、最短9か月から最長6年6か月にわたっている (表1参照)。

予後の評価については、学校での適応状態 (出席率、集団行動場面、友人関係、会話など) と、家庭での適応状態を考慮して、社会生活を送っていくなかでの内的・外的な適応程度に応じて「良好」、「やや良好」、「不変」と分類した。たとえば、「良好」とは、「高校に進学し、元気に登校している。クラブに入って友だちもできていし、先生にも喋っている (H. Y.)」のような症例である。「不変」とは、集団行動がとれず、修学旅行に行っても自分から歩こうとせず、みんなに押してもらって行った。テストは白紙で提出している。学校での発語は全くみられない (K. A.)」というような症例からなっている。

4. 結果と考察

(1) バウムテストの表現パターンを類型化した各群の特徴について

① 第Ⅰ群 (自我肥大型)

症例 H. Y., O. H. にみられるような型のものである。

第一の特徴は、幹にみられる。太く力強い、がっしりしたもので、輪廓線も明瞭である。樹冠は豊かではないが、力強さを感じさせる枝がある。運筆は、強圧・渴 (直) 筆で、幹・枝の部分をめぐる傾向がみられるが、手慣れたタッチとはいえない。樹は大きく描かれている。幹先端の処理能力は高いとはいえず、むしろぎこちなさがみられる (図1参照)。

この群は、自我に対する感情が敏感で、パーソナリティの完全性を維持しようとする欲求を感じている (Hammer, 1958)。内的には豊かなエネルギーを持っており、外界に対して適応しようという意志を持ちながらも、頑固で疎通性に欠け、外界からの圧力を強く感じて自己防衛を強化しているのである。これは、劣等感に対する代償としての自我肥大 (ego-inflation or

self-inflation) の投影と想定される。

この群の予後の見通しとしては、自我の強さ (ego-strength) があり、積極的に治療関係を維持していくことができ、かなりの症状の改善と、人格的な改善とが期待されるであろう。

② 第Ⅱ群 (自我収縮型)

症例としては、A. K., H. S., N. H. がこれに該当するバウムを描いている (図1参照)。

幹は細いが弱々しくはない。樹冠は、実や葉があり、枝も上方に張りながらも伸びやかさに欠けていて萎縮しているのである。樹は相当に成長したものでありながら、極めて小さい。運筆は、強い筆圧であるが遅緩している。幹先端処理は、年齢相応のものが示されている。発達の側面からみて、普通のバウムといえるのである。中には、幹は細く弱々しいものでありながらも、樹は大きいし、樹冠も大きい、枝は細長く横に張り弱々しくて、運筆も弱圧で薄いタッチのものも見受けられる。

この群は、内的な強さやエネルギーがないとはいえないが、外界に対して強く主張していくほどの力はない。外界への関心や適応への意志をもちながらも、弱々しくて消極的で、疎通性を欠き、劣等感がつよく、萎縮しているものである。一応、自我収縮 (self-constriction or ego-constriction) 型と仮定したい。

また、予後の見通しについては、第Ⅰ群 (自我肥大型) ほどではないが、潜在的にはエネルギーをもっており、積極的な治療に対して、好ましい治療関係がもちえ、かなりの症状の改善と、人格的な改善が期待できると思われる。

なお、第Ⅰ群と第Ⅱ群 (自我肥大型と自我収縮型) とをあわせて、神経症的な群 (Neurotic Group) と仮定する。

③ 第Ⅲ群 (未成熟型)

症例としては、J. A., N. S., I. T., H. Y. である (図1参照)。

バウムテストにおける発達の側面からすれば、いわゆる幼型とでもいえる表現パターンのものである。すなわち、電柱型の幹 (平行幹)、幹上直 (幹の上端がまっすぐに角ばっている)、一線枝、ステレオタイプ (常同性・紋切り型) のもので、加えて、空間倒置 (実の着き方が空間的に逆になったりしている) がみられる。

直線的な描線で、技術的にも幼稚 (kindisch) であり、小さい樹木が多く、図式的表現のものである。全般的に白っぽく、あっさりした印象を受ける。年齢や知能を考慮して、発達の未分化なバウムといえる (藤岡・吉川, 1971; 一谷・林・津田, 1969; 国吉・小池・津田・篠原, 1962)。

この群は、精神発達の未成熟・遅滞と同時に、萎縮した状態にある。したがって、一応、未成熟群 (Immature Group) と仮定する。

治療的な予後の見通しとしては、バウムテスト所見からみて、エネルギーの貧困、基本的な力に欠け (自我の強さの乏しいこと) であり、積極的な治療によっても大きな人格的改善はかなりむずかしいのではないかと思われる。

④ 第Ⅳ群 (性格偏倚型)

症例は、T. R., K. A. である (図1参照)。

この群のバウムテストの表現の特徴は、第Ⅰ群 (自我肥大型) のように幹は太く、大きい樹

で、バイタリティ (vitality) を感じさせるものである。樹冠は大きく、画面からはみ出しもみられる。運筆はどの群よりも手慣れており、技術的にもしっかりしたタッチである。また、立体描写もあるが、幹や枝に傷やぬりつぶしがみられたり、曲折したり、ふくらみとくびれがあり、無気味に空間をさまよう樹木である。一見して、多少とも奇怪な印象を与えられる。

この群は、第Ⅰ群（自我肥大型）と同様に、内的な強さや基本的な力をもっているが、抑圧・抑制が内界につよく充満し、自己に対する強い強制がみられる。バウムテストの発達の見地からすると、良好ではあるが、バウムとしては稀少なものである。性格的偏倚が推測され、バウムテストからみて疑問の残る群である。予測の見通しについても、明確なものを得ることがむずかしい。

一応、性格的偏倚群と仮定することにしておく。

⑤ 第Ⅴ群（疑問型）

症例では、Y. H., I. M., I. H. がこの群に該当するものである（図1参照）。

この群のバウムは、一貫した特徴を示すものは見受けられず、上記の4群に入らないものである。たとえば、症例 Y. H. は、情短に入所して治療を受けていた期間も含めて、3回にわたって、6枚のバウムを描いたが、幹が幾分太くなった以外は、全く変化の認められなかった症例である。この群もやはり、今述べた症例の如く、人格的な偏倚が推測されつつ疑問の残る群である。

予後の見通しについても、明確な仮説を立てにくい群である。

なお、第Ⅳ群と第Ⅴ群とをあわせて性格偏倚的疑問群と仮定する。

(2) バウムテストの表現パターンの類型と予後との関係について

ここでは、症児の予後を調査した結果と、バウムテストの表現パターンによって分類した5つの類型的パターンとの間の対応的な関係を考察してみたい。

表2-1によると、予後が「良好」あるいは「やや良好」とみられる症児は、バウムテストの表現パターンの類型では、第Ⅰ群（自我肥型）と第Ⅱ群（自我収縮型）とに多く、いわゆる神経症的傾向群とわれわれが称している群に落ちるものばかりで、「不変」のものは認められない。予後が「不変」と考えられるものは、逆に、第Ⅲ群（未成熟型）と、第Ⅳ群（性格偏倚

表 2-1 バウムテストの表現パターンの類型と予後との対応関係

予 後 バウムテスト			良 好		やや良好		不 変	
神 経 症 的 傾 向 群	Ⅰ群	自我肥大型	4	1	1			
	Ⅱ群	自我収縮型		3				
未成熟群	Ⅲ群	未成熟型					4	4
性格偏倚的	Ⅳ群	性格偏倚型			1		4	2
疑 問 群	Ⅴ群	疑 問 型				1		2

(注) この表について、予後について良好・やや良好・不変の3段階、バウムテストについて神経症的傾向群・未成熟群・性格偏倚的疑問群の3群別で χ^2 -検定を行なうと、 $\chi^2=12.60$, $df=4$, $.01 < p < .02$ で有意差があることがわかった。

型）・第Ⅴ群（疑問型）とに集中しており、わずかに第Ⅴ群の1名が「やや良好」に落ちている。つまり、予後「不変」者は、未成熟群ならびに性格偏倚的疑問群に集中するという事実がうかがえるのである。

このような事情から、各群のパウムテストの所見にみられるように、第Ⅰ群、第Ⅱ群のいわゆる神経症的傾向群については、内的な強さ (inner strength), 基本的な力 (basic power) が少しでも感じられる様式でありながらも神経症的な表現パターンを示すパウムを描く症児の予後は、かなり良好と考えられる。果たして予後の予測とも合致する結果となっている。

第Ⅲ群（未成熟型）については、いわゆる精神発達の未成熟な遅滞した感じの表現パターンを示す症児なのだが、彼らは、4名とも予後「不変」であることがわかる。症状や人格の改善の相当の困難さを示唆しているといえよう。

第Ⅳ群（性格偏倚型）と第Ⅴ群（疑問型）とは、ともに、人格テスト的、発達テスト的側面からみて、性格偏倚的傾向への疑問をいだかせる症児からなっているが、予後的には、変化がほとんどみられておらず、依然として問題や困難が残っていることがうかがえる。この群についても、症状や人格の改善への至難さが暗示されているかに思われるのである。

(3) 処遇形態・パウムテストの表現的類型・予後の相互関係について

パウムテストの表現パターンの類型と処遇形態（情短・SW指導・通所治療・面接1回）および予後との関係を示す結果は表2-2に示す如くである。

表 2-2 パウムテストの表現パターンの類型・処遇形態および予後の相互関係

予後	処遇			
	情 短	SW指導	通所治療	面接1回
良 好	3 { Ⅱ Ⅱ Ⅱ			1 {Ⅰ
やや良好	2 { Ⅰ Ⅴ			
不 変	4 { ⅢⅢ ⅣⅤ	2 { Ⅲ Ⅴ	1 {Ⅴ	1 {Ⅲ

(注) Ⅰ～Ⅴはパウムテストの表現パターンの類型を示す

情短で収容治療を受けた症児9名のうち、予後「良好」なものは3名であり、そのパウムテストの表現パターンの類型は第Ⅱ群（自我収縮型）に集中している。「やや良好」なものは2名で、第Ⅰ群（自我肥大型）と第Ⅴ群（疑問型）の症児であった。「不変」のものは、4名あり、第Ⅲ群（未成熟型）が2名、第Ⅳ群（性格偏倚型）・第Ⅴ群（疑問型）が各1名であった。

こうした事実は、収容治療での、個人心理療法・環境療法（生活指導・プログラム活動）・学校教育・親への面接指導という一貫した積極的な処遇（林脩三, 1969）にもかかわらず、予後に変化のみられない症児がほぼ半数 (4/9) みられ、それと、パウムテストの表現パターンの類型が第Ⅲ群（未成熟型）、第Ⅳ群（性格偏倚型）、第Ⅴ群（疑問型）に集中していることとは、対応関係のうで注目すべき結果を示唆しているものといえる。

SW指導については、予後はいずれの症例も「不変」であり、パウムテストの表現パターン

の類型は第Ⅲ群（未成熟型）と第Ⅳ群（性格偏倚型）とである。親や学校に対する助言指導では改善が相当に困難であり、症児に対する処遇としてのSW指導のむずかしさとあり方を暗示しているものといえるだろう。

通所治療は、週1回1時間程度の治療を行なっているものであるが、変化が認められず、バウムテストの表現パターンの類型では第Ⅴ群（疑問型）に属している。

面接1回の症例については、本来は情短への入所を指導したけれども親からの拒否によって面接指導1回のみで終了したものからなっている。そのうち1例は「良好」であり、第Ⅰ群（自我肥大型）に属しているもので、他の1例は予後「不変」で第Ⅲ群（未成熟型）に属している。

以上のようなことから、場面緘黙症の処遇に際しては、かなりの至難さが示唆されており、しかも、相当積極的に治療を施しても、症状や人格の改善が容易でないことがわかる。ましてや、SW指導、通所治療、面接1回という程度の処遇では、より一層困難性を伴っていることがはめかされているように思われるのである。

さらに、バウムテストの表現パターンの類型との関連からいえば、第Ⅰ群（自我肥大型）と第Ⅱ群（自我収縮型）とのいわゆる神経症的傾向群では、予後の見通しがかなり明らかなことがうかがえるが、第Ⅲ群（未成熟型）、第Ⅳ群（性格偏倚型）、第Ⅴ群（疑問型）では、治療のむずかしさは一層厳しいものであり、治療的なアプローチが慎重に検討されなくてはならないということを示唆しているかにみえる。

(4) 処遇後の経過期間・予後・バウムテストの表現パターンの類型の相互関係について

ここでは、処遇後から予後調査までの経過期間と、その調査結果、およびバウムテストの表現パターンの類型との関係についてみてみたい。

表2-3にみられるように、処遇後の経過期間が比較的短い（2年未満）症例8例のうち、予後「良好」なものが2例あり、それらはバウムテストの表現パターンの類型では第Ⅱ群（自我収縮型）

表2-3 処遇後の経過期間・予後・バウムテストの表現パターンの類の相互関係

経過期間 予後	2年未満	2年～4年	4年以上
良 好	2 {Ⅱ Ⅱ}	1 {Ⅱ}	1 {Ⅰ}
やや良好	1 {Ⅰ}	1 {Ⅴ}	
不 変	5 {ⅢⅢ ⅢⅢ Ⅴ}	3 {Ⅳ Ⅳ Ⅴ}	

(注) Ⅰ～Ⅴはバウムテストの表現パターンの類型を示す

に落ちている。予後「不変」のものは5例あり、第Ⅲ群（未成熟型）が4例、第Ⅴ群（疑問型）が1例となっている。こうしたことから、短期間の経過では、症状や人格の変化を期待することの困難性が、とりわけ第Ⅲ群（未成熟型）について考慮されると同時に、逆に、第Ⅱ群（自我収縮型）については比較的短期間でも改善への可能性が期待されることがうかがえる。

処遇後の経過期間が比較的長期（2年以上）にわたる6例のうち、2例は予後「良好」であり、バウムテストは第Ⅰ群（自我肥大型）と第Ⅱ群（自我収縮型）とのいわゆる神経症的傾向群に属している。予後「不変」のものの3例は、バウムテストでは第Ⅳ群（性格偏倚型）と第Ⅴ群（疑問型）に該当している。これらのことから、処遇後の経過が比較的長期にわたったとしても、バウムテスト表現パターンの類型で第Ⅳ群（性格偏倚型）ないし第Ⅴ群（疑問型）に属する症児の場合には、症状や人格の改善がむずかしく、第Ⅰ群（自我肥大型）・第Ⅱ群（自

我収縮型)〔神経症的傾向群〕では、かなり改善されていることが示されている。

(5) バウムテストの表現パターンの類型・処遇の形態・処遇後の経過期間・予後調査の相互関係についての結果

バウムテストの表現パターンの類型、処遇の形態、処遇後の経過期間、予後調査の結果の4者の関係について、上述した〔結果と考察〕の(1)～(4)をまとめて、バウムテストの表現パターンの類型を中心に考察する。

第Ⅰ群(自我肥大型)については、処遇の形態や処遇後の経過期間の長短にかかわらず大体において予後は良好といえる。

第Ⅱ群(自我収縮型)については、3症例とも情短で収容治療を受け、処遇後の経過期間が比較的短期間であるが、予後の結果は良好な症例ばかりであった。

第Ⅲ群は(未成熟型)、処遇形態が、情短・SW指導・面接1回と異なっているが、予後の調査結果はいずれも「不変」である。ただし、処遇から予後調査までの期間がいずれも短期間であり、この結果をもって、この群が予後不良群とは断定し得ないのである。

第Ⅳ群(性格偏倚型)は、処遇形態が、情短・SW指導の各1例ずつであるが、処遇から予後調査までの期間が比較的長いにもかかわらず、予後の結果はいずれも「不変」である。

第Ⅴ群(疑問型)は、処遇形態が、情短・通所治療であり、処遇から予後調査までの期間が比較的長期の症例が含まれてはいるものの、予後の結果は「不変」のものが多くなっている。

(6) バウムテストの表現パターンの類型と生育史との関係について

ここでは、バウムテストの表現パターンの類型と、一谷ら(1973)による、『場面緘黙症の研究Ⅰ——形成要因と心理機制について』に示されたものから、その生育史にみられる特徴との関係を吟味してみたい。

第Ⅰ群(自我肥大型)は、いずれの症例の場合も、出産時障害、既往症において問題が認められない。発症以前に母親が就労してはいるが、養育態度は概して溺愛的といえる。神経症的な傾向ないし習癖(夜尿、水をこわがるなど)を伴っているのが共通した特徴である。

第Ⅱ群(自我収縮型)は、いずれの症例についても、発症以前の社会的経験が乏しいことと、母親の性格が無口で気が弱く、遠慮勝ち、忍従を特徴としており、他に共通したものは見られない。

第Ⅲ群(未成熟型)は、いずれの症例についても、長子であり、溺愛あるいは過保護の養育環境にありながらも、発症以前の社会的経験は大体普通に持っていたのが共通した特徴である。

第Ⅳ群(性格偏倚型)は、父親が厳格で母親が放任の症例と、父親が無口で母親が短気の性格をもった症例とがあるが、両症例に共通した生育史上の特徴はみられていない。

第Ⅴ群(疑問群)は、共通した特徴は認められない。

(7) バウムテストの表現パターンの類型と症状との関係について

ここでは、バウムテストの表現パターンを類型化した各群の症児と、その症状・行動特徴との関係をみてみる。すなわち、第Ⅰ群(自我肥大型)は、学校やその他の集団内での身体的硬直は認められず、集団内では集団行動がとれ、テストなどを受けることが可能である。学校で女兒にいたずらをしかけたりする症例(O. H.)もみられる。また、家庭内では横暴で、わがままな子であり、近所の人にはあつかましく振舞ったり(O. H.)、買物に行ったり(H. Y.)などす

る症例もある。

自我脅威のない安全な家庭場面では、自己主張が強く、自己中心的な行動が目立つのである。こうしたことから、われわれが仮定した第Ⅰ群（自我肥大型）としての特徴的な解釈仮説（ないし仮定）は、一応、症状や行動の特徴との間に対応的關係がみられるのである。

第Ⅱ群（自我収縮型）は、ここに入る症例に共通した症状や行動特徴はみられないけれども、母子分離の困難な症例（H. S.）や、家庭外の場面ではちょっとしたことで泣く症例（A. K., H. S.）や、日常の生活態度が消極的で姉に依存的になっている症例（A. K.）が含まれている。いずれにしても、活気の乏しい依存的な症例が集まっているといえる。

第Ⅲ群（未成熟型）は、保育所では保育士になじみ、保育を独占したがりが、運動会などには保育士と一緒に参加でき、診察時にも検査者と遊びたがるが、発語の全くみられない症例（I. H.）や、診察時最初は恥かしがり、母親のうしろにかくれて顔も出さず、泣いたりするが、慣れるにつれて笑顔を示し、心理検査にも積極的になり、会話も自然にでき、行動も活発になる症例（N. S.）が含まれている。症例 I. H. は、脳波検査の結果は、生理的に未成熟と診断されている。また、症例 I. T. は、小学校に入学して1・2年までは比較的問題もなく登校していたが、転校してから担任に話さなくなり、3年になって厳しい担任になって症状が一層顕著になったものである。

この群は、一貫して頑固な緘黙症状を呈しているのではなくて、行動水準では、かなり活発なものを場面によっては出すが、厳しい脅威的状况に置かれると萎縮してしまいう児童が多い。やはり、人格的な未成熟さを背景にしていると考えられる。この点に関しては、バウムテストからの所見ないし解釈的な仮定との対応がうかがえる。

第Ⅳ群（性格偏倚型）について共通した行動上の特徴は、集団内で行動するさいに身体的硬直がみられることである。そのほかには共通した特徴はみられない。症例 T. R. は、家庭内ではきょうだい喧嘩をよくし、大声で話したり、笑ったり、近所でもよく遊ぶ。にもかかわらず、学校では教室の移動ができず、授業中に教室内をうろうろと徘徊したりする。また、症例 K. A. は、学校で孤立し、授業中教科書も出せず、ノートもとらないで友だちの世話になっている。しかし、国語の教科書は声を出して読む。

この群は、上記各群にみられない特異な状態像のみられる群である。

第Ⅴ群（疑問群）は、共通した行動上の特徴はみられない群である。症例 I. M. は、2年以上にわたって通所治療中のケースであるが、治療場面でも全く喋らない。学校では返事もしないし、友だちもないが、順番で本を読まされると小声で読んだりする。家庭内では、母親にセラピストからの伝言を伝えられない。最近になって、登校時下痢・腹痛を訴えて登校を拒否しはじめたが、兄から「進級できなくなる」と注意されて再登校したりしている。また、症例 Y. H. は知能優秀であり、学校での集団行動はとれる。小学校に入学当初は、ほとんど喋らなかったが、2学期以後、指名されると小声で返事をし、本も読むようになった。しかし、2年生の第1学期に近所の親しい友だちが転居してからは友だちがなくなり、再び学校でも喋らなくなった。

このように、この群には、第Ⅳ群と同様に、一貫した特徴がなく、しかもかなり各症例に特異な状態像のみられる群である。

なお、各症例についての詳細な資料に欠けるため、十分な検討ができないが、各類型と、症例の持つ状態像ないし行動上の特徴との間に、なんらかの対応関係のみられる群もある。けれども、そうした対応関係の不明な群もあるので、今後さらに検討していく必要性があると思われる。

5. まとめ

場面緘黙症児にバウムテストを施行し、その表現パターンの類型と、症状、発症以前の養育環境、処遇形態、予後との相互関係について考察してみた。その結果を要約してみると、次のようになる。

(i) バウムテストの表現パターンの類型は、5型に分類され、それぞれ④第Ⅰ群（自我肥大型）、⑥第Ⅱ群（自我収縮型）、③第Ⅲ群（未成熟型）、④第Ⅳ群（性格偏倚型）、⑤第Ⅴ群（疑問型）と一応名付けられた。また、④と⑥とを神経症的傾向群、③を未成熟群、④と⑤とを性格偏倚的疑問群と大きく3群に分けた。

(ii) バウムテストの表現パターンの類型と予後との関係をみると、第Ⅰ群と第Ⅱ群とは予後「良好」な症例が多く、第Ⅲ群、第Ⅳ群、第Ⅴ群では「不変」の症例が多かった。

(iii) バウムテストの表現パターンと症児の行動や症状との関係では、一応の対応関係がかなり積極的にかがえるが、不明な群もある。

(iv) 症児の処遇については、早期発見、早期治療が必要ながことが痛感された。情短のような、積極的な一貫した処遇にもかかわらず、症状や人格の大きな改善を期待することがかなりむずかしいと思われるケースのあることがわかった。他の処遇形態（SW指導・通所治療・面接1回）での治療は、一層困難であることがかなり明瞭であった。

(v) 大要以上のような結果がみられたが、バウムテストを場面緘黙症児に施行し、バウムテストの表現パターンを類型化することへの試論的な形で展開して、予後との対応関係に検討を加えてみて、このテストを精神診断学的な補助手段として臨床的に応用することが可能であることが実証しえたのではないかとと思われる。今後さらに他の心理検査や治療過程などを通して検討を加えていきたい。

ただし、銘記すべきことは、本研究ではある程度臨床事例への応用が可能であることが見出されたが、Koch (1952) が、“(バウムテストには) 十分な性格的特徴の把握を可能にする絵もあり、単に人格診断の手助けになるだけの絵もある。しかし、ほとんどの場合は後者である”と述べているように、“いわゆる盲目分析の危険を絶対に犯してはならない”ということを付記して、臨床的場面への応用を深めていくことが必要であると思われる。

Ⅱ. 場面緘黙症児にみられる P-F スタディの反応特徴と予後との関係

1. 目的

バウムテストにおける場合と同様、プイジェクティブ・テクニクのひとつの代表としての P-F スタディを用いて、場面緘黙症児における反応の特徴を精神測定的な見地から検討してみるとともに、P-F 反応にみられる力動的な特徴が予後との間にどのような関係にあるかをみようとする。すなわち、場面緘黙症に実施した P-F スタディの反応特徴から、場面緘黙の状態にある児童の心的構造を明らかにすることと、反応パターンと予後との関連を検討することで

ある。

2. 対象

一谷ら (1973) による『場面緘黙症の研究Ⅰ——形成要因と心理機制について』の対象となった症児のうち、初診時に P-F スタディを実施したもの19名（ケース No. 14 を除く）を対象としている。対象者の具体的内容の記述は、上記の『場面緘黙症の研究Ⅰ——形成要因と心理機制について——』の表4に詳細に掲げられているので、ここでは一応割愛する。

3. 方法

実施法や反応語の評点については、改訂版 P-F スタディ使用手引（住田ら, 1964）に従った。結果の処理については、さらに次のような2つの手続きを行なった。

(i) 被験者によっては、2～3の場面で、誤認や拒否があり、反応数が異なるため、各評点因子毎に百分率に改めた。

(ii) さらに、被験者には年齢の開きがあり、反応の出現頻度のみでは比較できないために、対応する年齢群の平均と標準偏差とを用いて、標準得点 (Z-score) に改め、全対象児童を同一の尺度で評価できるようにした。

こうして得られた標準得点をもとに、場面緘黙児の全体的な反応の特徴をみることにした。

反応のパターンの種類の決定にさいしては、E, I, M という3つの攻撃方向のうち、どの攻撃方向を主に採用するかを各被験者の標準得点の相対的な差によって、次のような基準で分類することにした。すなわち、

(i) プラスの標準得点が単独で出ている場合は、その攻撃方向に、

(ii) プラスの標準得点が同時に2つある場合は、0.3以上出ている攻撃方向にという具合である。

予後については、昭和46年9月に対象児の家庭や学校の担任に直接電話で状態を問い合わせたり、児童福祉司の調査や、施設からの情報を得て、集団への参加度、積極性、神経性習癖の有無などの観点から、初診時の状態と比較し、改善された点の多いものから、「良好」、「やや良好」、「不変」の3段階で評定を行なった。具体的には、本研究で先に述べた、『バウムテストの表現特徴と予後との関係』の項で記載されている通りである。詳細については、表1を参照されるとよいが、大きくまとめたものが表3である。

表3 P-F スタディを入手しえた症例

ケース No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	15	16	17	18	19	20
名前	N A	H Y	M Y	I T	O Y	A K	Y H	T R	H S	S J	K A	I M	J A	O H	N S	N H	I T	H K	H Y
群(P-Fによる類型)	II	I	IV	II	IV	III	II	V	I	V	IV	V	IV	II	IV	II	V	I	V
予後		◎	×	○		◎	○	×	◎		×	×	×	○	×	◎	×	×	×

(注) 1. 予後のうち ◎は良好, ○はやや良好, ×は不変を示す。

2. 予後の記載のないものは、予後調査が不可能であったものである。

えてみたい。

場面緘黙児は、個体が不満を起こす場面を、あたかも誰も非難すべきでない不可避の事態として軽く見すぐす傾向がある。しかし、その場合にも、自己の感情をそのようにいつわって、不満場面に深く関与しないという動機がつよく、不満感情のすなおな表明を回避する防衛機制のひとつと考えられる。M%の高いことについても同様に考えることができる。ローゼンツェイクによると、M反応の背景には、愛情獲得への欲求と愛情喪失への恐怖とが同時的にはたらいっているとす。そこに“かまわない”、“どうでもいい”といったいわゆるM反応が生起すると考える。いわゆる妥協 (compromise) の機制が考えられるが、同時に、無関心 (unconcern) をよそおうことによって、不満状況に直面して、相手をも自己をも傷つけないといった不安回避的動機を想定することもできる。ローゼンツェイクでは、M-反応を示すものの精神的異常の状態像としては、ヒステリー性の症状と破爪型分裂症を想定していることも臨床像として考慮に入れる必要のあることもあながち否定しえない面を持っている。

同様のことが、e-反応の低さについても考えられる。この評点は、不満を起こさせた問題について、他者による解決を期待する反応であって、依存・救済・庇護への欲求を想定せしめる。場面緘黙児において、こうした反応が少ないことは、対人関係において一定の心理的な距離を保っており、他人への信頼感にもとづく他者依存ということがおこないにくいことをほのめかしているように思う。

(E+I) は、超自我阻害的な状況に直面して、肯定的にせよ否定的にせよ、自我を主張し、積極的に自己を保身するのに必要なものである。場面緘黙児では、相手から非難されたり、叱責されたりして、超自我を迫害されそうな状況に遭遇してさえ、「わたしではない」とか「…になったのは斯々然々の事情があったんだ」と自己を積極的に守るという行動がとれないことを示している。つまり、自我の弱さを物語っているともいえる。また、ある意味では超自我の未発達の状態、つまり、家庭などでのしつけによる道徳的意識の低さを暗示しているのかもしれない。

攻撃方向では、無罰反応や内罰反応といった消極的反応が多く、不満感情を対外的に表明することが少ないことを示している。

反応型でいえば、自己防衛 (E-D) について障害優位 (O-D) が多く、不満事態での障害だけを指摘するにとどまるものの多いことを示している。そして、要求固執 (N-P) 的な反応の低さから、なんらかの形で事態解決への意欲の低さを暗示している。

④ 反応転移について

転移の出現率は高く、1人について1～6個 (平均 3.4) の反応転移がみられる (表4の右欄参照のこと)。その点、自己の防衛的反応が一貫して取りえず、欲求不満耐性の低いことがうかがえる。

転移の内容は、前半には E, e, E, N-P が、後半には M, O-D, M が多い。すなわち、前半では E, e や E%, N-P の如き、場面緘黙症児にとっては積極的と思われる反応が多く、後半でこれが少なくなること、いいかえれば後半ではこうしたE系統の反応を抑制した反応がふえてきていることが示されている (表5参照)。

E系統の反応について、ローゼンツェイクは、情緒的には敵意を伴った怒りを考え、処罰を

表5 反応転移の傾向一覧表

	前 半	後 半
E'	3 (8.6)	
E	7 (20.0)	1 (3.3)
e	6 (17.1)	
I'		
I	3 (8.6)	1 (3.3)
i		
M'		
M		5 (16.7)
m	1 (2.9)	
E	6 (17.1)	2 (6.7)
I	3 (8.6)	2 (6.7)
M		11 (36.7)
O-D		7 (23.3)
E-D	1 (2.9)	
N-P	5 (14.3)	1 (3.3)
延べ数	35 (100.1)	30 (100.0)

(注) 反応転移は1人の症例について2つ以上のものがあるので延べ数で計算してある。() 内の数値は%を示す。

そこで、ここでは、各症児の P-F 反応パターンの類型に従って、場面緘黙児にみられる、いわゆる類型の特徴を検討してみることにする。具体的には、P-F 反応パターンの類型化を行なってみると、表 6 に示すようになる。

① 第Ⅰ群 (I 反応型) : I 系統の反応を主とする群で、ケース No. 2, 9, 19 がこれに該当する (表 4 参照のこと。以下同様)。

② 第Ⅱ群 (E 反応型) : E 系統の反応を主とする群で、ケース No. 1, 4, 7, 15, 17 がこれに該当する。

③ 第Ⅲ群 (E-I 混型) : E 系統の反応と I 系統の反応とを主体とする群で、ケース No. 6 がこれに該当する。

④ 第Ⅳ群 (E-M または I-M 混型) : E 系統の反応と M 系統の反応とを主体とするもの、あるいは、I 系統の反応と M 系統の反応とを主体とするものとの群で、前者にはケース No. 13 が、後者にはケース No. 3, 5, 11, 16 が該当する。

⑤ 第Ⅴ群 (M 反応型) : M 系統の反応を主体とする群でケース No. 8, 10, 12, 18 がこれに

恐れる自我が働いて投影的に外界を非難、攻撃する反応となることを仮定している。こういう点と緘黙児の実際にとる行動とをあわせ考えると、場面緘黙児は、表面的外面的行動様式は消極的な面が多いが、内面的にはかなり外罰的傾向を持ちあわせていることがわかる。しかし、一貫してそういう構えをとることが何らかの原因で困難なようである。場面緘黙症の心理機制について、敵意の置換え、攻撃性の間接的表現、拒否の置換え、社化会を受け入れることへの拒否、自己の感情を傷つけた者への武器としての抗議または反抗などが考えられてきていることを考えあわせてみると、P-F 反応のこうした E 系統反応の転移の多いことは興味深い点である。

前半に顕著に出ている E 系統の反応は、後半にはどの方向に流れるかをみると、主として M 系統の反応 (M と M) や O-D 反応に流れることがわかる。一般的にいえば、内面にある敵意や攻撃・怒りの情緒を、不安回避的に (置換えて) 妥協反応 (M 系統) や抑制的反應 (O-D) としての表現型で表出することが多いことがうかがえるのである。

(2) P-F 反応パターンの類型の特徴

場面緘黙症児の反応を全体的にみると、以上のような特徴がみられるが、これはあくまでも、全体の平均からみた特徴であって、どのケースもそういった重味づけからなっているとは限らない。

表 6 P-F 反応パターンによる類型化的群別

	E%	I%	M%	E'	E	E-E	e	I'	I	I-I	i	M'	M	m	E	I	E+I	M+I	GCR	O-D	E-D	N-P
M	-0.37	0.14	0.32	-0.04	-0.15	-0.07	-0.76	0.23	-0.2	-9.24	0.62	-0.35	0.79	-0.19	-0.04	-0.23	-0.46	0.25	0.26	0.04	0.22	-0.15
M.D.	1.08	0.98	0.87	1.22	1.17	0.94	1.0	0.69	0.72	0.92	2.05	0.39	1.08	0.8	0.44	1.02	0.81	0.66	1.18	0.67	0.71	1.07
第Ⅰ群		+		-	-		+			+	+	-	-	-	-						-	+
第Ⅱ群	+			+	+	+	-		-	-	-	-	-	-							+	-
第Ⅲ群				+	+	+	-		-		+		+	-								-
第Ⅳ群		+	+		-	-	-	+					+	+	-	-	-	+				
第Ⅴ群			+				-				-		+		-	-	-	+			+	-

(注) 1. M は平均値, M.D. は平均偏差を示す。

2. 表中の正 (+) 符号は、該当する反応数が平均より1平均偏差以上高く、負 (-) 符号は平均より1平均偏差以下に低いことを示す。

該当する。

表 6 は、こうした各群間の相違を各評点因子別に概略的にまとめたものと考えてよい。これをもとにして、各群の類型的な反応パターンについて考察してみよう。

① 第Ⅰ群 (I 反応型) について：

内罰者の行動の主動機は、自己の完璧を期し、欠点をなくすことによって、自我の独立性を維持しようとするところにあるといわれている (住田ら, 1964)。すなわち、あやまちを恐れ、自己の不完全さを常に気にし、たえず自己批判的な構えをとりつづけている。そのために、欲求不満の状態をひきおこした原因を自己に求めがちで、反応としては謝罪や贖罪的なものが多くなるし、逆に、他者攻撃 (E)、攻撃的否認 ($\bar{E}$)、妥協的反応 (M) は少なくなる。ただこの群は、他の群に比して、e-反応が高くなっているが、出現場面を見ると自我阻害場面が圧倒的に多い。つまり、明らかに相手または外界事情が阻害の原因になっている場面なのであるが、このような場面では、相手がわるいのであるから自我の独立性は犯されることがない。けれども、そうした場面でも内罰者では直接的な相手非難にはならず、自己に原因があると受けとめ (認知し) た場合に自己がそのつぐないをするのと同様で、他者にそのつぐないを求めるといった形 (e-反応) をとることにより不満の原因の解消をはかろうとするのである。

かかる類型的反応パターンをもっているために、自我の独立性・安全性を常に維持するためには、自我の脅威となりそうな場面をたえず回避していくことが必要となるが、内罰的であるがゆえに、相当の緊張やエネルギーの消耗をきたす。そのために無罰傾向や障害優位傾向への反応転移を行なうことによって、その緊張をやわらげようとしている。

② 第Ⅱ群 (E 反応型) について：

外罰者の反応主動機は、自我の独立性の確保にあることは内罰者と同様ののだが、内罰者と異なるところは、相手を非難することによってそれを達成しようとする（住田ら、1964）と考えられている。すなわち、他者に原因があるときはいうまでもないが、自己の弱点や失策が阻害の原因となった（超自我阻害）ときでも、それを認めず相手を非難すること（投影）によって自己の保全を確保しようとするのである。

この群に多くみられる反応は、E, E-E のような直接的な相手非難であるが、相手からの非の指摘があまりに強烈なときや、逆に、相手の側から先に非を認めて鄭重に働きかけられたときには、直接的な相手攻撃という形でなく、相手非難を抑制して、被害の事実に対する不平や失意を指摘する形の反応（E'）になってくる。しかし、要するに、そのような形で自己の保全が確保できればそれでいいわけで、不満の原因をどのように解消するかには力点がおかれていない。そのために、要求固執的反応（e, i, m）はいずれも低くなっている。

こうした形の反応だけで自己の保全を確保することは、実際には困難であるが、この群の症児は、それ以外の自己防衛の仕方が限られているので、自己防衛の見地からすれば、未熟な防衛の仕方しか身につけていないことになる。

反応転移からみても、外罰系統の反応の転移は少なく、内罰・無罰系統、要求固執、障害優位などの転移がみらるところから、外罰以外の反応パターンをとることも若干みとめられるが、一貫せず、社会化過程の遅れがみられる。

③ 第Ⅴ群（M反応型）について：

考察の都合上、一応、純型的な今ひとつの第Ⅴ群（M反応型）から先に述べることにしたい。

無罰者の主動機は、外罰・内罰者では自我の独立性確保に重点があるのに対して、相手から愛されたい（愛情獲得への欲求）、にくまれたくない（愛情喪失への恐怖の回避）ということにある。そのためには、自我の体面などはこれを苦もなく捨て去ることができるのである。

したがって、この群のものは、観念的にも感情的にも、自己にとって不利なことは自我体制から完全に切りすててしまう（抑圧または無視；repression or negation）。かくして、自己の弱点や失策についても全く無関心でいることができる。このことは、E, e, i や超自我因子の評点の低いことからもうかがうことができる。

しかしながら、この群は、反応転移をみてもわかるように、第Ⅱ群（E反応型）にみられるような外罰的な防衛の仕方が全くないというわけではなく、前半ではそういったものがみられるが、その反応を一貫してとれない点がこの群の特徴といえる。

このようにして、この群は、一般的には、観念的にも感情的にも自我関与が弱く、欲求不満事態に対してもそれを無意識的に抑圧することによって、あたかも不満を感じないかのように反応することになる。

④ 第Ⅳ群（E-M 混型または I-M 混型）について：

これは（外罰反応と無罰反応）または（内罰反応と無罰反応）の混合した形で全体の反応を示す群である。前者は、E'、後者はI'が高く出ている以外は大体似かよった反応の仕方をしている。E'とI'は攻撃の方向では異なるが、いずれも抑制、禁止が働いている点では共通である。E', I' による反応のちがいで以外には第Ⅴ群（M反応型）とよく似た反応パターンがみられる。つまりM反応が比較的高く起自我因子の評点がともに低い。その点、この群は、外罰や

内罰方向の反応をすることがあるが、そのいずれについても抑制が働いていて、十分な防衛的役割を果たしておらず、やはり主体となるのは、第Ⅴ群（M反応型）のような反応のパターンであると考えられる。

⑤ 第Ⅲ群（E-I 混型）について：

この群は、その反応の仕方からみて、外罰方向の出方は第Ⅰ群（E反応型）と、内罰方向の出方は第Ⅰ群（I反応型）と、また、無罰方向の出方は第Ⅴ群（M反応型）と、それぞれにかよったところがある。この群に入るものは、1ケースしかなかったため、十分にこの群の反応パターンについては知りえないが、外罰・内罰・無罰という各攻撃方向の機能がいずれも採用されているだけに、防衛機制という点からいえば、かなり広い防衛の方法をもっているものと考えられる。

以上5つの群について、P-F 反応パターンについて考察してみたが、今回の情報の範囲内では、場面緘黙児の生育史や検査実施当時の臨床的症状との明らかな対応はつかめなかった。今後この方向の研究を行なってみたいと考えているが、現段階では、こうした P-F スタディの反応パターンの類型的なちがいが、場面緘黙症の類型をそのまま示すものとは考えていないことを断っておきたい。

(3) P-F 反応パターンの類型と予後との関係

P-F スタディ反応パターンの類型（Ⅰ～Ⅴ群）と予後の「良好」、「やや良好」、「不変」との関係については、表7に示すが如くである。この表からも明らかなように、第Ⅰ～Ⅲ群のよう

表7 P-F 反応パターンの類型と予後との関係

P-F		予 後		良 好		やや良好		不 変	
内罰・外罰群	第Ⅰ群	I 反 応 型	2					1	
	第Ⅱ群	E 反 応 型	1	4	3	3			1
	第Ⅲ群	E-I 混 型	1						
無 罰 群	第Ⅳ群	E-M また は I-M混型						4	
	第Ⅴ群	M 反 応 型						4	8

(注) 予後については良好・やや良好不変の3段階、P-F 反応パターンについては、内罰・外罰群と無罰群の2群に分けて χ^2 -検定を行なってみると、 $\chi^2=12.448$, $df=2$, $p<.01$ で有意差がみとめられた。

に、主としてE反応、I反応またはその両者からなっているような反応パターンを示す症児では、予後の「良好」なものが多く、逆に、第Ⅳ、Ⅴ群のように、主としてM反応的なものが関与している群では、「不変」のものが圧倒的に多いのである。津田ら（津田・出井・飯田、1969）は、登校拒否児について、P-F 反応からみられる性格と予後との対応関係を研究しているが、これによっても無罰的反応の多い子どもが一般に予後のよくないことが報告されている。本研究でも、症状のことなる臨床群の子どもについて同様の結果を得ており、注目すべき点であると思われる。

そこで、予後の「良好」なもの、と「不変」のものとは、各評点因子の出方にどのような

相違があるかをみてみた。

予後の「良好」（ここでは、予後の評定の「良好」、「やや良好」をともに「良好」群としてあつかった）なものに共通して高くみられる評点は、(i) E , (ii) $E-E$, (iii) $E+I$, (iv) i である。これらの評点は、予後「不変」者では、逆に低い。

予後「不変」者に高くみられる評点因子は、(i) M , (ii) m , (iii) $O-D$, (iv) I , (v) $I-I$ であって、これも予後「良好」のものには逆に低くなっている。

すなわち、予後「不変」者では、無意識的抑圧や前意識的な抑制（ M 系統の反応または $O-D$ 系統の反応）が働いており、ときには無関心的になる場合がかなり多い場合や、内罰的反應で示されるような防衛態勢にあって、緊張を簡単に低下させることのできない機能をもつ防衛機制のもとでは、その後の症状改善をもたらしていくことをほめかしている。その点、外罰反应的な防衛機制が中心になっているときは、他者非難的とはいえ、心的エネルギーを内面的に持ちあわせており、ローゼンツァイクのいうように、物事への接近的意欲や企図性 (enterprise), 自己主張性 (self-assertion) を保有しているといえる。 $E+I$ もやはりこうした意味では、否定的ないしは肯定的な形の自己主張性といえる。さらには i にみられるように、自己自身による問題解決への意欲や（献身的）努力をもちあわせていると考えられる。つまり、症状改善への心的エネルギーないしは活力 (vitality) をたくわえているものとうかがえるのである。

5. まとめ

以上のように、場面緘黙症児に $P-F$ スタディを実施し、その反応パターンの類型的なものと予後との関係について考察してみたが、その結果を要約してみると次のようになる。

(i) $P-F$ 反応パターンの類型は大きく5型に分けられ、それぞれ、㊸ 第Ⅰ群（ I 反応型； I 系統の反応を主体とするもの）、㊹ 第Ⅱ群（ E 反応型； E 系統の反応を主体とするもの）、㊺ 第Ⅲ群（ $E-I$ 混型； I 系統の反応と E 系統の反応とが主として混在しているもの）、㊻ 第Ⅳ群（ $E-M$ 混型または $I-M$ 混型）、㊼ 第Ⅴ群（ M 反応型； M 系統の反応を主体としているもの）であった。

(ii) これらについて、類型的な反応パターンに言及する以前に、 $P-F$ 反応パターンの全体的な特徴をみたところ、つぎのようなことがわかった。すなわち、

㊸ 評点因子では、無罰反応が高い。

㊹ 攻撃方向については $M\%$ が高く、 $E\%$ が低い。

㊺ 反応型では $N-P$ が低い。

㊻ 反応転移をみると、前半は E 系統の反応が顕著であり、同時に $N-P$ が前半にみられるが、後半になると、 M 系統の反応や $O-D$ 反応が多くなる。

(iii) このようなことから、従来いわれてきているように、場面緘黙という症状が、心理的な機制としては、敵意や反抗ないし怒りの情緒のおきかえとしての反応であり、表面的は無言を呈して妥協的反應となるということが、ある程度、 $P-F$ 反応パターンのうえからは妥当のように思える。

(iv) しかし、これは全般的特徴であって、類型化してみると先に述べたように大きく5つの類型的な反応パターンを持っているものがあることがみられた。

(v) そこでこうした5つの類型的反応パターンと予後との関係をみてみた結果は、次のよう

になった。

㉑ 外罰反応、または、内罰反応を主体とした反応パターンを示す症児においては一般に予後がよい。

㉒ 無罰反応を主体とした反応パターンを示す症児では、圧倒的に予後がよくない。

しかしながら、P-F反応パターンからは、最初に述べたように、すでに場面緘黙という状態にある児童の反応パターンをさぐれるだけであって、本症状の発生機序やパースナリティなどについて言及することについては、一応仮説的段階にとどまるもので、現段階では限界のあることを再度ことわっておきたい。

(vi) 少なくとも、今までは、場面緘黙症の子どもについては、その接近法について、症児そのもの所産になるものが少なかったが、投影法のなかでも P-F スタディのような形のものは、バウムラストと同様、一応実施可能であることは示唆されたのである。従ってまた、治療の経過にともなう行動の変容や症状の改善をみるのにも適用可能と思われるのである。

III. バウムテストの表現パターンの類型・P-F 反応パターンの類型と予後との関係

最後に、付加的に、バウムテストでの表現パターンの類型と P-F 反応パターンにみられる類型とを併せて、予後との間にどのような対応関係があるかをみてみよう。

表 8-1 にみるものがその結果である。これをさらに大きくまとめたものが表 8-2 である。これらの表からわかるように、およそ次のことがいえるようである。

(i) バウムテストで神経症的傾向群におちる症児は、P-F 反応では、内罰中心、外罰中心、または内・外罰混合の反応を示す。そして、この群に入る症児は一般に予後は「良好」である。

(ii) バウムテストで未成熟群または性格偏倚的疑問群におちる症児は、P-F 反応では何らかの形で無罰中心的な反応を示すものが多く、彼らは、一般に予後が「不変」のものが多い。

表 8-1 バウムテストによる表現的類型と P-F 反応パターン類型と予後との関係

バウムテスト		第 I 群	第 II 群	第 III 群	第 IV 群	第 V 群
P-F		自我肥大型	自我収縮型	未成熟型	性格偏倚型	疑問型
第 I 群	I 反応型	◎ 2, H. Y.	◎ 9, H. S.			
第 II 群	E 反応型	○ 15, O. H.	◎ 17, N. H.			○ 7, Y. H.
第 III 群	E-I 混合型		◎ 6, A. K.			
第 IV 群	E-M または混合型 I-M			× 13, J. A. × 16, N. S.	× 11, K. A.	
第 V 群	M 反応型			× 18, I. T. × 20, H. Y.	× 8, T. R.	× 12, I. M.

(注) 1. 表中の◎は予後の「良好」、○は「やや良好」、×は「不変」を示す。

2. 予後についてのしるしのあとの数字はケース・ナンバーを、英語の頭文字は名前を示す。

表 8-2 バウムテストでの表現的類型と P-F 反応パターンの類型と予後との関係

バウムテスト P-F			神経症的傾向群		未成熟群	性格偏倚的疑問群	
			第Ⅰ群	第Ⅱ群	第Ⅲ群	第Ⅳ群	第Ⅴ群
			自己肥大型	自我収縮型	未成熟型	性格偏倚型	疑問型
内罰・外罰群	第Ⅰ群	内罰反応型	◎ 2, H. Y. ◎ 6, A. K. ◎ 9, H. S. ◎ 17, N. H. ○ 15, O. H.			○ 7, Y. H.	
	第Ⅱ群	外罰反応型					
	第Ⅲ群	内罰・外罰混型					
無罰群	第Ⅳ群	外罰・無罰混型 内罰・無罰			× 13, J. A. × 16, N. S. × 18, I. T. × 20, H. Y.	× 8, T. R. × 11, K. A. × 12, I. M.	
	第Ⅴ群	無罰反応型					

(注) 1. 表中の◎は予後の「良好」、○は「やや良好」、×は「不変」を示す。

2. 予後のしるしのあとの数字はケース・ナンバー、英語の頭文字は名前を示す。

3. 本表は表 7-1 をさらに大きくまとめたものである。

こうしたことから、一応、バウムテストと P-F スタディとは、臨床的妥当性ないし予測的妥当性がうかがえることをほのめかしているのではないだろうか。特に、今回の研究では、そのことが予後との関係において言及しえたと思う。

IV. 結論と要約

従来、場面緘黙症の研究では、症児そのものの所産になるところの資料でもって、その発生機序的な側面に言及したり、診断・治療的な側面に接近したりするものはせいぜい治療場面などでの行動様式が主体であった。

投影法的な性格テストなどによって、これを明らかにすることができはしないかとの着想のもとに今回の研究では、主として、バウムテストと P-F スタディを用いた。

その結果、かなりの範囲で適用可能であって、臨床的ないし予測妥当性があることが、特に、予後との関係においてかなり積極的に支持された。

参 考 文 献

Buck, J. N. The H-T-P technique. J. clin. Psychol., 1948, 4, 151—159.

出井康子・飯田美智子・津田浩一 登校拒否児の性格と予後〔Ⅲ〕—バウムテストの結果からの検討— 1969 日本臨床心理学会第5回大会発表論文集。

Hammer, E. F. A comparison of H-T-P's rapists and pedophiles. J. proj. Tch., 1954, 18, 346—354.

Hammer, E. F. The clinical application of projective drawing. 1958, Springfield: Charles C. Thomas.

藤岡喜愛・吉川公雄 人類学的にみたバウムによるイメージの表現 季刊人類学, 1971, 2—3, 3—28.

林 脩三 情緒障害児施設における集団療法 水島恵一・岡堂哲雄(編) 集団心理療法 1969, 東京, 金子書房, 第12章, pp. 254—282.

林 勝造・国吉政一・一谷 彊(訳) バウム・テスト 1970, 東京, 日本文化科学社。

一谷 彊・林 勝造・津田浩一 樹木画テストの研究—Koch の Baumtest における発達の検討—京都教育大学紀要, 1969, Ser. A, No. 33, 47—68.

一谷 彊・津田浩一・西尾 博・岡村憲一 場面緘黙症の研究 (Ⅰ)～(Ⅳ)：(Ⅰ) 形成要因の検討，(Ⅱ) P-F スタディにみられる特徴，(Ⅲ) バウムテストにみられる特徴，(Ⅳ) 心理機制的検討へ向けて 1971 日本応用心理学会第38回・関西心理学会第83回合同大会発表論文集

一谷 彊・津田浩一・西尾 博・岡村憲一 場面緘黙症の研究Ⅰ—形成要因と心理機制について— 京都教育大学紀要，1973，Ser. A，No. 42，1—28。

Koch, C. The Tree Test: The tree-drawing test as an aid in psychodiagnosis. 1952, Bern: Hans Huber.

国吉政一・小池清廉・津田舜甫・篠原大典 バウムテスト (Koch) の研究——発達段階における児童 (正常児と精薄児) の樹木画の変遷——児童精神医学とその近接領域，1962，4，237—246。

住田勝美・林勝造・一谷 彊 改訂版 P-F スタディ使用手引 1964，京都，三京房。

住田勝美・林 勝造・一谷 彊 ローゼンツァイク人格理論 1964，京都，三京房。

津田浩一・出井康子・飯田美智子 登校拒否児の性格と予後〔Ⅱ〕——P-F スタディの結果からの検討—— 1969 日本臨床心理学会第5回大会発表論文集

Summary

In previous studies of the children with elective mutism, the methods of approach to this symptom were mainly dependent upon the modes of behaviors without vocal expressions by these children. Because, up to date, none of the vocal expressions or speech by these children in the group situations such as in the class room situations were generally obtained, studies of such children which depended upon the products by themselves have not been observed. If there has been any of such studies, generally speaking, they have mainly depended at best upon the informations from the interview with the parents (or the rearers) of the children, social workers, the overt behaviors during the process of therapy, or so.

The present study, therefore, attempted to gain the products by such children themselves, to specify the genetic mechanisms of this symptom, and to relate these products to the prognosis of the children with this symptom.

For such purposes, the applications of some of the representative projective techniques, namely Koch's Baumtest and Rosenzweig's Picture-Frustration Study, to these children seemed to be very adequate, because it was not necessary to express vocally the responses to these tests by themselves.

In line with these purposes, the responses to the two tests by such psychogenic mute children could be obtained. Generally speaking, the two tests were applicable to the children with psychogenic elective mutism, and were clinically and predictably valid.

The main results with special reference to prognosis of the children with psychogenic elective mutism were as follows:

- (i) The modes (or types) of the expressions (or drawings) of the tree (der Baum) by the children with elective mutism positively relate to goodness, fairly goodness, and unchangeableness of prognosis.
- (ii) The modes (or types) of reactions to such frustration situations as represented by the P-F Study by the children with elective mutism also positively relate to the degrees of prognosis.
- (iii) So far as concerned with the present study, it seems to be premature to conclude that the genetic mechanisms (or the psychodynamic mechanisms) of elective mutism are able to be adequately specified by these tests.

本研究の資料の収集，予後調査にあたり，大阪市中央児童相談所，大阪市立児童院（情緒障害児短期治療施設），京都市児童院青葉寮（情緒障害児短期治療施設）の先生方に御協力いただいた。ここに深く感謝の意を表します。